

は蘆浦本知として四百七拾石（天正八年九月十七日の寺領指出目録には參百四拾壹石外に佐甚九代官所分貳百七拾石此内百五拾石扶持分とあり及び志那渡船を進むること見えたり。所謂佐甚九は佐久間甚九郎なり）これに據つて益支那渡に觀音寺所屬の船舶ありしを見るべく、而かもこは在來のものゝを改めて安堵せることなれば、既往に於ても觀音寺の舟奉行たる機關に供せられつゝありしかと思はる。されば秀吉の時には更に此特權を湖上全面に伸張せしめ、これに加ふるに其富源とせる近江の直轄地の代官を命じて、こゝに我寺院史上特殊の一新例を開くことゝなりしものならん。

六

思ふに室町時代殊に所謂戰國時代は社會階級の最も混亂を極めし時代にして、武士と一般庶民（土民）との間に過去の如き身分上の等差を存せざりしのみならず、僧侶と俗人とも亦これと同じく、

前者は政治・法制・經濟・商業等種々なる世間の俗務に關與したりしなり。觀音寺の江州代官たりしは勿論、其湖水舟奉行たりしも亦此時代の産物として見るべく、決して人畜濟度といふが如き宗教的觀念に基因せるものにてはあらざるべし。而かも僧俗の分離を見たりし江戸時代に於て、貞享年間に至る迄も、此法制上の變態たる前代の遺風が依然として繼續せられたりしは、確に一異彩を放てるものと謂はざるべからず。

朝鮮史の葉 (第一回)

文學士 今西 龍

本稿は史學に興味を有し朝鮮史を特別に或程度まで知らんと欲する人の爲に起稿せしものなり。其通俗にして實際に適切ならん事は本篇の主旨なりとす。本篇先づ朝鮮史の大系を成す史籍に就て説明し、次に特殊の事項を調

査するに資たるべき史籍論文に及ばんとす。而して古朝鮮の中箕氏朝鮮と稱せらるゝ國は朝鮮民族の建てしものなれども其國斷絶して後に關係なきを以て措て問はず。衛氏朝鮮と半島に於ける漢郡縣との研究は日本及朝鮮古代史研究にも頗る必要なりと雖、是れ畢竟東方亞細亞諸國史の研究に支那史研究の必要なる一例にすぎざるを以て本篇には此部分と朝鮮民族の有史前時代と名くべき三韓狹義に用時あたるに關するものを省略することゝなせり。朝鮮半島史は朝鮮併合後東西兩帝國大學共に之を國史料に編入せしも、學問の系統より見れば併合前の朝鮮史は明に東洋史の一部分なるを以て其研究の進路は之を東洋史の方向に採り朝鮮學若くば朝鮮史を研究せんと欲する者は先づ東洋史特に支那學の概要を修得すべし而して更に進んで其研究をなすに當りては如

何なる部分の研究たるを問はず支那方面の之に對する事項の考察を伴はざるべからざるなり。

朝鮮史に入るには最初に文學博士林泰輔氏の朝鮮通史を讀むべし、博士の舊著には此外に朝鮮史明治二十五年吉川半七發行朝鮮近世史明治三十四年同人發行近世朝鮮史早稲山大學講義録の内あり朝鮮通史富山房發行は前記諸書中最最近に著述せられたる物にして他に比類なき良書なるが故に再三通讀し先づ朝鮮史の大意を知るべし。而して此書と併せ讀むべきは朝鮮社會考朝鮮靈兵司令部編朝鮮風俗集今村賴氏著朝鮮物語集蔡京城文星堂發行朝鮮風俗集京城野口保コレア、ゼ、ハミツトネーシヨンケリス氏等朝鮮に關する雜書なり。地圖は陸地測量部發行の東亞輿地圖百萬分長崎・釜山・京城・旅順・鏡城・奉天の數葉を用意すべし。但し何の書を讀み何の說を聽くにも先入の說が主となることは注

意して避くべきとなるが特に朝鮮の事物の如く學者の研究日尙ほ淺くして更に新研究新考察の余地あるものに對しては冷靜の態度を失はず後説を容るゝの心構へなかるべからず。朝鮮語に關しては前間恭作氏韓語通丸善發行國分國夫氏日韓通話同高橋亨氏韓語文典博文館發行ゲール氏韓英字典の類あり。漢字の朝鮮音を知るには全韻玉篇、漢鮮文新玉篇の類によるも可なり。森潤三郎氏の朝鮮年表春陽堂發行小藤金澤兩博士共編の朝鮮地名字彙丸善發行は坐右に備ふるを更とす。尙ほ朝鮮總督府發行の月刊雜誌「朝鮮彙報」には確實なる調査報告の類の掲載せらるゝ事あり東洋協會の「東洋時報」、朝鮮雜誌社の「朝鮮及滿洲」刊にも往々有益なる記事あり。

第一章 朝鮮史の大系をなす史籍

高句麗百濟新羅の三國各國史修撰の事あり。其

他記錄野乘の類も多少作成せられしも現今遺存するものは皆無にして新羅王朝時代の書籍の如きも其末期の文士崔致遠の桂苑筆耕が李朝に至りて支那刊本より翻刻されしものあるのみ。文獻の湮滅驚くべし。但し新羅僧撰述の佛經注疏釋義の類は日本の古寺に傳りしもの數種あり日本續大藏經中に收めらる朝鮮にて撰みし史籍の遺存せるもの、最も古きは三國史記にして之に次ぐものは三國遺事なり。但し三國遺事中には史記に先つこと數十年前に撰まれし駕洛國記を收録すと雖省略せるものにして全文にあらず。史記遺事共に王氏高麗朝に撰まれしものにすぎざるも今日半島史籍の新羅高句麗百濟三國の事を誌せるもの此二書の外に出でず。此時代の研究は此二書と支那日本の史籍及半島の金石文遺物によるの外なしとす。次に朝鮮史の大系をなす此等の史籍に就て簡單なる説明をなすべし。

第一 三國史記

新羅高句麗百濟三國の史記の義にして、高麗仁

宗王二十三年乙丑近衛天皇久安元年金富軾等王命を奉して撰す。紀傳躰にして新羅本紀十二卷、高句麗本紀十卷、百濟本紀六卷、年表三卷、志類九卷、列傳十卷、併せて五十卷あれど、各卷短きを以て簡單なる書にすぎず。三國史記は金富軾等が始めて撰みたるものにあらずして、其當時既に三國史記若くば類似の名稱の史籍の存在せしを、此時更に重撰せしものなることは、東文選及東文粹に載する進三國史記箋には一言も記せざれども、高麗の文士李奎報の東明王篇序李相國集卷三によりて明白なり。此舊三國史記に就ては何等の知る所なし。高麗史洪攽傳に「睿宗嘗覽編年通載命權撰集三韓以來事蹟以進」とあり。吾人は編年通載につきても洪攽撰進の書につきても其内容に就て知る所なし。雖も洪攽の書が三韓即三國三韓が三國の義に用あたる、こゝは坪井文學博士嘗て史學雜誌に論じ置かれたりの史籍にして此書が睿宗に繼ぎし仁宗王代に傳はり更に高宗の時に及び李奎報の見るに至りしこと推測に

難からず。舊三國史記とは此書若くば此類の書なるべし。三國の史料の現朝鮮に遺存するもの三國史記と此書よりも百五十年後に撰まれし三國遺事との外には十數通の金石文と若干の遺物遺蹟あるのみ。三國史記の朝鮮史に於ける位置は我が國史に於ける日本書紀の位置を占む。

此書もしくば舊三國史記が編纂に資せし史料に就て考察せんとす。三國に於ける國史編纂の事蹟を稽ふるに高句麗には國初に留記と云ふ書ありしを嬰陽王十一年に刪修して新集五卷を撰み、百濟にも近肖古王頃より記録あり新羅には眞興王六年に新羅國史撰まれたり。之を當時半島と大陸との關係及文運の大勢より考察するに事實なるべし。舊三國史記編纂の當時此等の史籍若くば此等の史籍に系統を有する文献の或は斷片ながらも遺存し延て其重撰の時に及びしが如し。三國史記に引用する東海古記、三韓古記、新羅古事、新羅古記の

類は此種の史籍なるべし。而して高句麗百濟二國に於ては上記二三の文献以外には極めて簡單なる王代一覽の類の如きものゝ遺存せしにすぎざるが如し。たゞ新羅は他の二國に勝ちて半島を統一し唐代文化に薰陶せられたる二百余年の王朝を建て其末路の如きも少くとも王都は戰鬪の甚しき慘禍を蒙らず香車寶馬連亘して高麗王氏朝に入り貴族子弟は身を保ち家を全うして新王朝に移りしが故に高麗朝に其文献の多く遺存せしと論なきなり。三國史記が引用する唐令孤澄新羅國記、崔致遠の年代曆、同文集、金大問の高僧傳、花郎世記、樂本漢山記、雞林雜傳、崔承祐の餉本集の類、李奎報が次韻吳東閣世文詩注^{李相國集卷五}に引用する新羅記新羅禱記の類は三國史重撰の時に存在せしものなり。金富軾が三國史重撰の時には舊三國史が資料として採りし文献は尙ほ遺存せるを富軾は其上更に廣く史料を蒐集して舊三國史記を修正添削し尙ほ通

鑑冊府元龜等當時新に輸入せられて秘府に藏せられし支那史籍の記事を掇拾轉載して其缺を補ひ或は其文を美にして以て之を撰せしものならむ。然るに三國史記が引用する遺文史籍の撰者中令孤澄は唐書藝文志に乾符年代の人とあれども新羅人にあらずか故に之を外にし、崔致遠金大門崔承祐等盡く新羅王朝末の人なり。新羅王朝史料の缺乏すること驚くべし。此結果として三國史記は此王朝年代に入りてすら錯誤少からず。其一例を擧ぐれば清海鎮大使弓福即ち新唐書列傳の張保皐、續日本後紀の張寶高の死が續日本後紀の詳細なる記事によりて文聖王三年なること動すべからざるに史記は之を七年に繋げることの如きこれなり。尙ほ他に類例少からず。高句麗紀に於ては試に廣開土紀と此王陵碑と其記事を比較するに碑記に誌すが如き詳細なる記事は此王紀に見ざるのみならず殆ど之を缺けり。長壽王以後に至りては更に其國

に傳へし記事缺乏し嬰陽王以後に至りては一層甚だし。百濟紀に於ては威德王以後史料の缺乏を極む。而して嬰陽威德兩王以後の二國は共に支那方面と頻繁なる交渉ありしを以て三國史記は支那史籍より關係記事の文を掇拾して其紙面を填め本國のみの事を記すると極めて少し。三國史記に載する支那方面に關する記事は高句麗紀上古の部と他に稀なる場合との外は其書の全体を通じて支那史籍を抄出し轉寫し或は撥拾し之を其相當年代の下に何等の顧慮なく挿入せるものにして或は其中には本國に史料あり乍ら其文を美にするが爲に事實の相異迄も犠牲として支那人の手にありし文章を竊取せし項ありやの臆測を施し得ざるにあらざるも縦ひ此事ありとするも極めて少かるべし。其掇拾せし支那史籍は資治通鑑、冊府元龜外臣部、後漢書、三國志、晉書、魏書、宋書、梁書、南史、北史、隋書新舊唐書等なり。東城王紀の注に齊書

云々ごあれども南齊書は之を見ざりしか如し。然るに高句麗及百濟特に百濟の後期には我が日本書紀に彼土の史料より誌せし比較的豊富なる記事あり。新撰姓氏錄また歸化人の家傳を載す。此日本史籍は三國史記の記事の缺を補ふ事多大にして之を正すと少からざるを以て之に依らずして三國史記のみにては三國特に百濟の事は調査すべからず。駕洛の研究の如きは主とし書紀に依るの外なきなり。然るに帶方郡末路の研究は三國史記百濟紀の記事に埃つものあり。此關係は百濟史日本書紀の關係と量に於て多少の差こそあれ稍類似せるものなり。

三國史記の紀年に就きては從來學者の之に信ををきしものあるを以て茲に一言すべし。三國中高句麗は最も早く開化せる國にして早くより記録あり。而して其國史には其理由若くば事情明かならざるも始祖東明王朱蒙の元年を漢建昭二年甲申に

其薨年を鴻嘉二年壬寅に紀せり。百濟人は高句麗と同じく朱蒙を以て始祖王とし之を歴代の中に加へ三國史記が其始祖王とする温祚王を第二代の王となせしは新撰姓氏錄の記事によりて明なり。三國史記が温祚王即位を高句麗朱蒙王薨年の翌年即鴻嘉二年癸卯となせしは新羅朝若くは高麗王氏朝の史家が三國の年代を比較配置するに當り高句麗古史籍の其國紀年の基礎とし之を以て百濟所傳の温祚王紀年を動かし若くは推定して朱蒙薨去の翌年となせしものならんか、尤も百濟は其文物高句麗より遙に後れて開けしを以て或は其本國に於て既成の高句麗史紀年に憑籍して之を鴻嘉二年に紀せしことも無しとは斷言すべからざるなり。新羅史が始祖王の即位元年を朱蒙即位の歳の同周甲の第一年甲子の歳に紀せしは其國人の愛國的感情より出でしこと推測に難からず。三國史記の紀年は高句麗に於ては小獸林王、百濟に於ては契王の頃

新羅にありては遙に下りて照智王以後に至りて信すべし。小生昨年十二月讀史會大會に於て三國比較年代考と題して私考を發表せんとせしが時間切迫して其設を盡くすこと能はざりしかば他日之を公表すべければ一讀あらん事を希ふものなり。

本書は王位繼承の際に三國の古例のまゝに踰月稱元の制をとれり。此事に就きては東洋學報第二卷の拙稿「朝鮮に於ける國王在位の稱元法」を參考すべし。尙ほ彼の小篇起稿の當時心付かざりし一事は三國史記にも踰月稱元を誤解せし一條のあることなり。即ち百濟の東城武寧二王間に於て東城王は二十三年辛巳十二月に薨せしを以て踰月稱元法に従へば新王武寧は其明年壬午正月を以て元を稱すべきが故に壬午歳を其元年に紀せざるべからざるに史記の撰者は不注意にも直に辛巳を其元年となせり。過誤の母は過誤の子を生み此に因りて史料の混同錯雜を生じ、正しく紀年せば元年壬

午十一月なるべき侵高句麗記事を、誤り紀せる元年辛巳十一月の條に記し、重ねて同記事の高句麗紀にあるものを百濟紀に移して二年壬午十一月の條にも抄入し、同一記事を兩年に重出せしめたり。尙ほ精査せば此類の誤謬は多く發見し得べし。

本書志類中新羅に關する記事多きを占め祭祀樂職官等に於て高句麗百濟に關するものは僅に支那史籍東夷傳中より不用意に二三記事を抄出轉載せしに過ず。是れ其本國に於ては稽ふべき文献の遺存せざりしによる。諸志中地理志は獨り史學のみならず言語の研究にも有要なる資料少なからず、然るに本書の最良本たる加賀前田本には此部に當る卷三十四より卷三十六までを缺くと聞けり、甚だ惜むべし。列傳は新羅人其大部を占め、高句麗には僅に數人、百濟には二人を收むるのみなるに高句麗人の列傳に出づる記事は既に本紀に出で重複せるもの多し。浩瀚なる書にもあらざるに此事

あるは粗漏不注意の譏免るべからず。列傳中には文士構成の傳奇的人物あり温達薛氏都彌の如き是なり。

本書は其撰成るや直に流布せしが如し。宋の王應麟の玉海^{卷十}に此書が淳熙元年宋朝廷の秘閣に入りし事を記す。本書は高麗朝に於て既に刊行せられしが李朝に入りて太祖王三年甲戌慶州にて刊行し、中宗王九年壬申同地にて再板せり。此時の慶州節制使李繼福の跋に「吾東方三國本史遺事兩本他無所刊而只在本府歲久剝缺一行可解僅四五字」^{成化十年}とあり。然るに成宗王實錄王十三年^{成化十年}十月の條に徐居正は此書を印せんことを論じ王の許可を得たりしことを記す。こゝに印せんとは京城に於て新に刊行印出の事なるか、慶州冊板に就きて印出頒布の事なるか、意義明瞭を缺くと雖、恐くば前者なるべし、然らば刊行の事實行せられざりしか其事明ならず。東京雜記及慶州府所藏冊板目錄中

に本書及遺事あるも乾隆二十四年の「完營冊板目錄」には慶州の項にも他處の項にも其存在を記せず。思ふに此時既に毀滅したりしならむ。而して東京雜記に記する冊板は或は正徳以後の重刊のものならんか現存の冊子を見るに正徳刊本よりも新しきものあり。

此書の日本に傳りし時代は明ならざれども慶長以後の事なるべし。大日本史にも異稱日本傳にも引用すれども其書稀少なりしを以て本居宣長を初め諸大家多くは東國通鑑に依て朝鮮古史を論せしものなり。我國に傳はり若くば轉寫されしものに現存するもの加賀本近衛本毛利神田本富岡本あり近衛本以下寫本にして加賀本は正徳刊本の如きも惜いかな五十卷中十五卷を佚す。近年朝鮮にて數部發見されたり。

此書近時刊行され世上に流布するに至れり。一は朝鮮古書刊行會本にして他は東京帝國大學刊行

本なり。大學刊行本に依るべし。尙ほ此書に就きては他日稿を改め其研究を詳細に發表せんとするの意あるを以て通俗を主とする本篇にては省略して茲に筆を擱かんとす。

第二 三國遺事

五卷。高麗忠烈王(日本伏見天皇御時代)の時即ち三國史記

撰述後約百五十年を経て慶尙道迦知山麟角寺の住持圓鏡冲照大禪一然これを撰す。一然の傳は不明也。朝鮮總督府參事官室の調査によれば慶尙道義に普覺國師一然の塔碑遺存すと雖今斷片となり記事明ならず。李朝世宗王實錄地理誌に「慶山縣忠肅王四年丁己以國師一然之卿陞爲縣」とあり。一然に就ての吾人の智識今日に於ては茲に止まる安鼎福は其著東史綱目の探據書目中に本書を擧げ僧無亟一然撰とせり。小生は無亟の語の出處を知らず。東史綱目を調査すれば或はうる所あるべきか、

本書撰述の目的は其書名其内容より推測する正

史即三國史記に載せざる三國の所傳談話を收録するにあり。佛敎全盛時代の佛僧の手に成りしを以て佛敎關係記事大半を占む。此書に就きては坪井先生の解題史學雜誌第十一編第九號にあり。

本書篇首に三國及駕洛の比較年代表あり三國史記年表に據りし物なるべきも王の在位年數に相異のもの三四あり。篇中に記する干支の相異する物と共に研究上注意すべし。卷一卷二は記異篇にして先づ檀君より記し三國の說話遺聞を録し駕洛國記を抄略附載す。此駕洛國記に就ては後に改めて説くべし。卷三興法外一篇卷四義解神咒感通避隱孝善の諸篇にして興法以下佛敎關係の記事なり。

本書は史籍として三國史記と共に見ざるべからざるものにして社會的記事は史記よりも本書に多し。其他種々貴重の史料を含み荒唐無稽の說話中にも得るところ少なからず。一語の注一句の辭にも意外の事實を包藏するものあり。特に三國の佛

敎史研究には本書を典據とせざるべからず。但し其記載せる古傳說中には後世の捏造附會構成に係るもの少からざるは斯る書籍の性質上止むことを得ざる事なり。魏書漢書などの記事なりとて掲出せるものに原本には決して無きものあり。魏書に出づとして誌せる檀君王儉の記事の如きは此一例なり。

本書中載する處の新羅の郷歌十數首は我が萬葉古歌に比すべきものにして其文また萬葉體なるを以て文學上語學上貴重すべきものなるが今之を解し得る者無しといふ。

本書もと慶尙道慶州府に冊板ありしを正徳壬申三國史記と共に同府にて再板せり。東京雜記の府藏冊板目中には此書の名あるも乾隆二十四年の完營冊板目錄には之を記せず。傳本頗る稀にして朝鮮にては絶無と稱せられ居りしが近年金剛山の某寺にて後半の一冊のみを發見せり。日本には幸に

も尾張徳川家及神田男爵家に各一部を遺存す、三本共に同一板本にしてたゞ金剛山本には脱葉を補寫挿入せる部分あり。此部分は兩家本に脱落せず神田本には養安院の記印あり徳川家本と共に文祿慶長役の分捕本なるべし。

東京帝國大學にては本書を明治三十七年神田本を底本として刊行せるも此刊本訂正を要すべき點甚だ多し。坪井先生の手許には訂正再板の稿既に成るものあるも未だ改板に至らず。日本續大藏經には大學刊本の句讀の誤十數個處を坪井先生が訂正せられしものを收めたり。本書の良本は改正板の出づるを待つの外なし。(大正五、六、八)

セリヌンテの石切場の遺跡

文學士 濱田耕作

希臘時代の大建築の一群の大風に吹き倒された

るが如き凄しきセリヌンテ (Selinunte) の遺跡に追懷の情を恣にしたる余は、グリンフィールド夫妻と其の夜をカステルベトラーノ (Castelvetrano) の云ふシチリヤ島のいと小さき田舎町に明しぬ、燭光暗くして讀書の便り無く、惡虫に惱まされては安眠成り難うして五月十四日 (大正三年) の曉は早く明け放れぬ、六時半我等は馬車を曉風に驅つて西南五六哩カムボello (Campobello) の附近なる古へセリヌンテの石切場に向ふ、シチリヤ探勝の客の多からざるうちにも、セリヌンテの遺跡を訪ふ人はいと少し、況して此の石切場の遺跡に足を向くるものは極めて罕なるを、同じ志の友を得て此の地に遊ぶことを得たるは、何の喜か之に勝る可き。

海道を進むこと一哩弱カサ、インガム (Cassa

Ingham) に到れば、早くも路傍にセリヌンテに連び行かんとせしを、其の儘中道に打ち捨てたる柱